

書 評

Doug Underwood, *Journalism and the Novel: Truth and Fiction, 1700 -2000*  
(Cambridge: Cambridge UP, 2008)

Dallas Liddle, *The Dynamics of Genre: Journalism and the Practice of Literature in Mid-Victorian Britain*  
(Charlottesville, VA.: U of Virginia P, 2009)

Matthew Rubery, *The Novelty of Newspapers: Victorian Fiction after the Invention of the News*  
(New York: Oxford UP, 2009)

閑 田 朋 子

1950年代以降、Richard Altick、Louis James、Margaret Dalziel がヴィクトリア朝のマス・カルチャーにおける先駆的研究を展開したのちに、いわゆるプリント・カルチャーが歴史・社会学・文学のインターディシプリナリーな分野に浮上し、文学とジャーナリズムの関係についても多くの研究がなされてきた。研究の焦点は、両分野で活動した作家、両分野の著作を読んだ／読んだであろう読者、共有されたトピック・テーマや文体上の因習、定期刊行物で連載されたのちに書籍として出版された文学作品、作家と批評家の関係など実に多様であるが、両分野を完全に切り離すことは不可能だという合意には達したように思われる。(モダニストたちが残した両分野の間の“Great Divide”については、Andreas Huyssen, *After the Great Divide: Modernism, Mass Culture, Postmodernism*, Bloomington: Indiana UP, 1986 及び、Laurel Brake, *Subjugated Knowledges: Journalism, Gender and Literature in the Nineteenth Century*, Basingstoke: Macmillan, 1994を参照されたい。)

そして2008 / 9年に、ジャーナリズムと文学の関係を研究する上でいまだに

錯綜するプリント・カルチャーの方法論を象徴するような3冊の本が上梓された。Doug Underwood の *Journalism and the Novel: Truth and Fiction, 1700-2000* は、ヴィクトリア朝に時代を限定してはいないが、英米300名以上の作家の人生を列挙することによって、ジャーナリズムと小説の間の歴史的関係を伝記研究の手法をもって包括的に描き出している。端的にはジャーナリスト兼小説家であった作家たちの存在は、文学とジャーナリズムの切り離せない関係をそのまま表している。プリント・カルチャーのデジタル・アーカイブは急速に発展中であり、手法面で試行錯誤の状態にならざるを得ない今だからこそ、伝統的手法で展開された安定した論は印象的だ。

これとは対照的に、意欲的な試みをしているが不安定さを感じさせるが、*The Dynamics of Genre: Journalism and the Practice of Literature in Mid-Victorian Britain* である。Liddle は、Mikhail Bakhtin のジャンルという概念を用いて、1855年から1867年という限られた期間に、ジャーナリストたちが用いた文学以外のジャンル（と想定されたもの）が、文学の作家に与えた影響を分析している。どのジャンルで情報を伝達するかによって伝達内容の意味が変わってくることから明らかに、ジャンルは意味の必要不可欠な構成要素である。そして Bakhtin によれば、小説というジャンルが台頭した時代には、他のほぼ全てのジャンルが多かれ少なかれ「小説化」(novelization) を被る。Liddle は Bakhtin のこの「小説化」という概念をよりどころに、「ジャーナル化」(journalization) という概念を提唱する。ジャーナル化をすんなりと受け入れ、そのジャンル形態や世界観を文学作品に上手く取り込む作家もいれば、それをかたくなに拒む作家もいる。またある作家は、一般的にはフィクションが先にあり、それを後からジャーナル誌上の批評が分析するわけだが、これを逆転させてフィクションを用いてジャーナリズムが英国社会に与えた影響を分析してみせる。全6章のうち4章はそれぞれ Elizabeth Barrett Browning、Harriet Martineau、George Eliot、Anthony Trollope を、5章はセンセーション・フィクションの作家達を扱っている。全体は Chaucer の *The Canterbury Tales* のパラダイムにはめこまれ、各章が“The Poet’s Tale”、“The Authoress’s Tale”といったタイトルを持つ。これらのケース・スタディを経て、第6章“The Scholars’ Tales”では、Bakhtin のジャンル論の適用が、ジャーナリズムと文学の境界を分析するためにいかに効果的か、という序文で問うた理論上

のテーマに戻る。

このようなスタイリッシュな構成や Bakhtin の理論の使用は尖鋭的な印象を与えるが、同時にしっかりとしたテキストの精読を行っている。だが残念なことにそれ以外の要素への目配りがおろそかになっている。たとえばプリント・カルチャーの研究は、ジャーナルのサイズ・ページ数・値段・発行頻度などに注目するマテリアル・カルチャーの視座とともに発展し、これらがテキストの内容と切り離せないことを証明してきたのだが、この点で十分な配慮・考察がなされているとはいいがたい。これに加えて Liddle に特徴的な尖った文体——たとえば Benedict Anderson、Jürgen Habermas、Pierre Bourdieu などの社会科学分野の理論を完全に否定しているかのようにも読める語り口——も原因の一端となり、Laurel Brake の酷評を招くことになった。だがその Brake も指摘するように、これは裏を返せば、Liddle がとった手法自体は他の要素・他の理論と組み合わせれば、実り多い手法だということだ (Rev. of *The Dynamics of Genre*, NABOL-19, 1 Sep. 2009, 1 Aug. 2010<[http://www.nbol-19.org/view\\_doc.php?index=19](http://www.nbol-19.org/view_doc.php?index=19)>)。

伝統的手法を守った Underwood とも、不安定だが今後の可能性を示唆する興味深い手法を用いた Liddle とも異なり、現在のプリント・カルチャー研究の主流を代表するのが、Matthew Rubery の *The Novelty of Newspaper: Victorian Fiction after the Invention of the News* であろう。Liddle と比較すると、ジャーナリズムの多様性の中で新聞に的を絞った分、論がすっきりしている。充実した史的研究とテキストの精読をバランスよく組み合わせ、次々と繰り出される痛快な考察が心地よい。本書を読むと、ヴィクトリア朝の小説を理解する上で、コマーシャル・コモディティとしてのニュースを合わせ見ることがいかに実り多い手法であるのかすんなりと納得できる上に、本来は私的領域に属するはずの私事が新聞という情報媒体を通して公領域にあふれ出てそれを侵犯していく様子がよく分かる。

本書は二部からなり、パート1は第一面の海運速報 (第1章) と私事広告欄 (2章) を、パート2はその内側に展開される論説 (3章) とインタビュー記事 (4章)、それに海外通信 (5章) を扱っている。パート1から2へはもちろん表面から内側の頁へという新聞をめくる順で構成されているのだが、各章の並び順は Rubery によると年代順である。すなわち海運速報は1840-50年代に

一般読者の目にも触れるようになり、私事広告欄はペニー・プレスとともに1860年代に花開き、1860-70年代の論説の影響力に応じて Trollope の一連の小説群が生み出され、インタビュー記事が英国で新聞の常連の位置を占めるようになったのが1880年代、1890年代になって初めて多くの新聞が自社特派員の署名記事を書せるようになったということである。

第1章で扱われる船舶の出立や海難を報じる海運速報欄は、船乗り・商人・投資家といった男性ばかりでなく、海の向こうの夫や恋人、兄弟などの安否を気遣う女性たちによっても熱心に読まれ、Charlotte Brontë、Wilkie Collins、Charles Dickens、Elizabeth Gaskell といった多くのヴィクトリア朝の作家たちがプロットを展開させる重要な道具立てとして用いている。第2章の私事広告欄については、Rubery が挙げた1850-60年代の *The Times* からの例をいくつか引用するだけでも、私事が公領域にあふれ出す様が生々しく伝わるだろう。

MINE OWN HUSBAND.—For God's sake COME BACK, and forgive me for any unkind word. (16)

HOW CRUEL. Why have you dragged me by fair words to further misery? Instead of keeping your long-promised engagement, you are off. (16)

The ONE-WINGED DOVE must DIE unless the CRANE RETURNS to be a shield against her enemies. (53)

短い広告文は、詳しい状況が分からないだけに読者の想像力に訴える。Mary Braddon の *Lady Audley's Secret* に見られるように、センセーション・フィクションの作家たちは、怪しげな結婚広告や行方不明者を探す尋ね人広告などから犯罪の匂いをかき取り、それをフィクションに活かしていく。そしてまた、かくもフィクションに似通った広告が新聞をにぎわせる。

論説を扱った第3章は、その書き手が個人として意見を述べるのではなく、“We” という報道の権威としてのペルソナを被っていること、そしてこのことを19世紀を通して多くの作家が批判していることを指摘した上で、Anthony Trollope の Palliser 小説群が、論説の持つ匿名性の裏に隠れた話者を描くことで新聞の権威に挑戦する様を考察している。第4章はインタビュー記事についての考察だが、公領域にあふれ出る私事を考える際にインタビューを外すことはできないだろう。ジャーナリズムはプライバシーへの侵害だと

考えたHenry James はめったにインタビューを受けなかったが、自身とは異なり個人的な経験をジャーナリストに喜んで話す人々に注目し、*The Bostonians* のSelah Tarrant のような登場人物を生み出した。James の *The Reverberator* と“The Papers”を論じた本章は、インタビューがなかなかやっかない — インタビュアーとインタビューの受け手の間にだけ存在する会話ではなく、読者として想定されたそこにはいない第三者との会話であり、それゆえに開示される情報は必然的に選択され、実はインタビューを受ける人間の自己を覆い隠してしまう — 代物であることが示唆されている。

1871年の1月に、宣教師にして探検家の David Livingstone を検索するために、Henry Stanley は アフリカに旅立った。海外通信を扱った最終章は、Joseph Conrad の *Heart of Darkness* と *New York Herald* および *London Daily Herald* に載せられた Stanley の Livingstone 検索の通信記の間の関連性を考察したものである。やがて己が目でアフリカを見た Conrad は、通信記に語られたアフリカとの違いから、新聞のディスコースに不信の目を向け報道のフィクション性を知り、“[a] wild story of a journalist” (17)だと自ら称する *Heart of Darkness* を執筆する。

本書は文句なしに面白く読み物としても十分に楽しむことができる。ただし、この面白さも内容の充実ぶりも、文学とジャーナリズムの共犯関係とも呼べそうなものを嗅ぎつける Rubery の鋭い感覚、つまり個人的な資質に負う面が大きいだけに、他の研究者が同じ手法で同じ効果を上げられるかという疑問は残る。

以上のように、ここで紹介した三冊はばらばらの手法を用いてはいるが、文学とジャーナリズムの間の密接な関係を描き出そうとしている点では一致している。そこから見えてくるのは、両分野を別領域に属するものとして切り離すのではなく、目を凝らして、その境界で何がどのようにどこまで共有されているのかより正確に測ろうとする、今後のプリント・カルチャー研究の方向性であるように私には思われる。